
梅雨明けの雨

アイラグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

梅雨明けの雨

【Nコード】

N5311M

【作者名】

アイラゲ

【あらすじ】

主人を助けてください。

梅雨入りの日の午後、突然毛利探偵事務所に押しかけた女性はそう言った。

ルパン三世と名探偵コナンのクロスオーバー小説。

始動：-12（前書き）

拙作はルパン三世と名探偵コナンのクロスオーバー小説となっております。

また、2009年3月に放送された「ルパン三世VS名探偵コナン」とは違う内容です。その話を前提に創らせて頂いたので、その後のある事件の物語、ということになります。

この小説には 墨縄紫 という人物が登場しますが、彼女は1987年に公開された映画「ルパン三世 風魔一族の陰謀」のヒロインです。そして石川五右衛門の若き妻。

訳あつて映画の作中では2人は一緒になる事は出来なかったのですが、拙作では話の都合上、色々あつたけれど無事に結婚しています。

そして、私はルパンファンであるためコナンサイドのキャラクター（ルパンサイドのキャラクター以上に）うまく作れない可能性があります。そういう時は、この人はこんなこと言わない、とか性格が違う、とかご意見をください。

ここまで読んで下さって苦手だ、と思つた方はどうぞご引き取り下さい。

問題ない、大丈夫と思つた方は・・・流れ弾や麻酔針にご注意ください。

日常の崩壊は、いつも見落としてしまうような小さな亀裂から始まる

ジメジメと蒸されるような6月の梅雨入りの日。

東京都米花市内にある私立探偵事務所もまた、この暑さにへばる男がいた。

男の名は毛利小五郎。「眠りの小五郎」の名で有名な探偵だ。しかしそれも仕事があればの話であって、今はどこにでもいる、只のおやじである。付け加えるなら競馬観戦真っ最中だ。

うだるような午後の暑さにうとうとと根負けしかけた。その時。

ピンポン

「ん？宅急便か？」

今日クライアントが来るなど電話はもらっていない。小五郎はテレビをつけっぱなしにしたまま、且つネクタイ緩みっぱなしのままドアを開けた。

「うあ〜い」（あくび交じり）

「・・・あなたが、毛利小五郎さんですか？」

「へ？」

玄関先に立っていたのは宅急便のお兄さんではなかった。髪の毛の長い、それなりに家柄の良さそうな若い女だった。

「・・・そうですけど、」

どちら様、と聞き返そうとした時女は急に血相を変えて、小五郎に詰め寄った。

「不躰な訪問だと分かっているんです。でも、お願いです。夫を助けてください」

「旦那さんを？って、あんたクライアントですか!？」

眠気がぶっ飛んだ。

「突然押し掛けて申し訳ございません」

「いやこちらこそ、汚い部屋ですいません。ところで、旦那さんを探してほしいって一体どうなされたんですか？」

小五郎は、はじめ気付けなかったが女にはゆすらという小さな娘がくつついていた。事務所に通し、墨縄 紫と名乗る女から話を聞くことにした。

「仕事と言って出て行ったきり、この四日間連絡もよこさず帰ってこないんです」

「失踪、ですか」

「だったらまだ良かったかもしれない……。主人の書齋にこの手紙が置いてあつて、どうも拉致の可能性が

ありそうなんです」

「拉致？」

紫がハンドバックから取り出し、小五郎に手渡した手紙はエアメールだった。表にはGoemon・Suminawaとワープロの文字がある。

(五右衛門?)

小五郎の知る限り、五右衛門と言えばかの有名な釜煎りにされた石川五右衛門しか頭に出てこない。随分洒落つ気のある名だと思つた。裏を返すと、送り主はUnited States Department of Defenseであつた。

「・・・でばーとめんとおぶでいふえんす」

「アメリカ国防省。通称ペンタゴン・・・。」

ゆすらが不安げに口を開いた。明らかに、この人で大丈夫なのだろうかという不安だ。

「ああ、ペンタゴンね、ペンタゴン・・・。ぺんたごん!!?」

驚きの声を張り上げる小五郎に、紫はうなずいた。

「夫は一時期、ペンタゴンの役職に所属していたんです。いえ、所属させられていた・・・。」

「させられていた?そりゃ一体どういうことですか」

その言葉に、不安の色を濃くしたゆすらが母親を見上げた。今度は一体なんだというのだろう。紫は大丈夫よ、と言つかのようによすらに微笑んだ。

「夫の正式な名前は十三代目石川五右エ門。本来なら正当な妻を娶り石川家の当主となる人物でした。……つまり夫の家は、代々盗賊だったのです」

小五郎は啞然とした。密室殺人以上に現実味の無い話だ、これは。

「……じゃあ、ペンタゴンには、その罪滅ぼしのために？」

「そうです。6年前に、500日間所属していました」

「では、本来ならつて、どういうことですか？」

「石川家は20年以上前に滅ぼされたんです。主人は最後の石川の人間でした」

ふうむ、と小五郎は椅子に身を沈めて机に置いたエメールに手を伸ばした。

「中を読んでも？」

うつむき加減になった紫は、答える代わりに頷いただけだった。

封筒の中には、揃いの赤と青の便箋が一枚だけ。本文ももちろん英語。そしてあつけないほど短い文章だった。

否、文章でもない。数個の単語が便箋の中央に並んでいるだけだ。

N a r i t a - a i r p o r t A . M 1 0 : 0 0

1 1 J u n e 2 0 1 0

「なんだこりゃ……」

「夫はその前日に飛驒の家を出ました。それから今日までの四日間、一切の連絡がありません」

「アメリカ大使館には行かれましたか？」

「はい。ペンタゴンにも連絡を取ってもらったのですが……これが問題なんです。国防長官も「石川五右エ門は呼び出していない」っていうんです。夫の任務は500日間を終了しているから、もう

呼び出すことはないって」

「は！？じゃあどこか別の人間がペンタゴンを騙ってご主人を呼び出したと！？」

「だと、考えるしか・・・」

紫は涙声になっていた。普段は気丈な彼女も五右エ門の身を思うと苦しくてしょうがないのだ。

「お母さん、お父さんならきつと大丈夫だから」

根拠も何もなかったがゆすらはそう言わずにはいられなかった。小五郎の眼にはゆすらの姿のほうに痛々しくうつっていた。

「警察にはもう言つてあるのですか？」

「いいえ。誘拐した相手が何者かわからないから、マスコミにすっぱ抜かれるようなところへは言わないほうがいいと思っただんです。

そのエアメールの消印はバージニア州（ペンタゴンの所在地）のですが、送り主は国内の人間かもしれないし・・・。無理な依頼とは解っているんです。ですけど、主人と面識のある人のほうが「なんですと？」

小五郎は紫の言葉を遮った。

「失礼ですが、私は旦那さんと会ったことは・・・」

「えっ？ヴェスパニア王国で会いませんか？」

「ヴェスパニアで？」

「ええ、日本の探偵とその子供のお陰で猟銃事件は解決したって言うてましたから、てつきり」

おそらく“その子供”とは蘭ではなくコナンのほうだろう。子供じゃないんだがな、と複雑な気持ちになった。

それから、その時一緒・・・ではないが王宮にいた人物は。ICP Oの銭形警部と・・・

「もしかして、旦那さんは、ルパン三世の仲間ですか・・・？」

「ええ、その通りです。仕事仲間だったのは8年も前のことですけど・・・ご存じ、ありませんでした？」

「や、知りませんでしたな・・・あ、ですがご心配いりません。旦那さんは、必ずこの毛利小五郎が見つけます」

そう言った小五郎の目の前で、紫はようやく安堵したような微笑みを見せたのだった。

「どうか、お願いします」

深々と頭を下げる紫に倣い、まだ不安（もしくは不信）な色を残すゆすらも頭を下げた。

「何、五右エ門が誘拐されただ？」

また拷問の話か？と次元はマグナムの手入れをする手を休めずにその情報を持ってきたルパンに聞き返した。心配する気はちゃんちゃら無いらしい。

「さあね。今仕事の情報買いに行っておまけにくれた情報だけど。

次元ちゃんコーヒー飲む？あ、いらない？あつそ」

「バーボン寄越せ」

ルパンの軽口は無視して酒を要求した。現在午後一時。この日の高い時刻から呑もうとしているのだ。

「お前確実にアル中だよな」

呆れたように言うものの止めようとしないうあたり、これが彼らの日常なのだろう。

「ほっとけ。で？さっきの話続きあんだろ？」

「ああ、そーそー。それでな、その話のおかしいところってのがなあ、世界各国でかなり名のある殺し屋が同時に消えたって事なんだよ」「次元に背を向け、サイフォンでコーヒーを淹れながらルパンは言った。

「どこぞのマフィアの用心棒してる奴も、暗殺専門の奴も、ジャンル、国籍、年齢、性別問わず。もちろん使ってるエモノだって銃火器類、剣刀類問わず」

「殺し屋経験があつて尚且つ腕が立つのであれば不問ってか？」

「らしーね」

「何人消えた？」

「よくわかんねーけど10人前後だと。で、首謀者及び目的は不明」
「ふーん」

「でもそいつらが消えた日時はほとんど同じで
ルパン」

突然ルパンのセリフを遮って次元が言った。

「何、次元ちゃん。アルコール切れ？」

「あんな、ルパン。俺たちは泥棒だぜ？誘拐事件の捜査は警察だろ
が。俺が聴きてえのは仕事の情報だけだ」

「あら冷たい。五右エ門ちゃんがどーなっても良い訳？」

「奴はもう、裏の人間じゃない」

と次元は言った。

「お前」

ルパンは次元の方を向くと仕方が無い、といったふうに関口を開いた。

「心配なら素直にそー言えよ、カタギになった五右エ門とその家族
が心配ですーって」

「仕事の話！早くしろよ」

ガシヤツと音を立てて、組み立て終わったマグナムのシリンダーを
装填し銃口をルパンに向けた。

「おーしてやるさ。お前、紫さんところに行け」

「なに？」

「よく聴けよ次元。俺だって五右エ門だけが誘拐されたってんな
らこんな話しねえさ。あいつはもうカタギで俺たち裏の人間にやあ
関係ねえ。表の事件は表の人間にまかしゃあいいさ。」

だが。今度狙われたのは 五右エ門 じゃねえ。 殺し屋 だ。

それも10人。大した話じゃねえか。これ、裏も表も関係ねえ話だ
ぜ」

「・・・」

おちゃらけた調子で話していたルパンの態度が急変した。

「首謀者も目的もわからねえが、これから起きる事には予想がつく。」

多分・・・

庭を荒らされたくないだけさ。

そう締めくくられたセリフの後、次元は明日の朝日本へ発つと口約し、自分でバーボンを取りに行った。

話し声が聞こえて、コナンは事務所の前で足を止めた。丁度学校帰りである。

今日、お客さんが来るなんて話していたっけな？と疑問に思い、彼はランドセルを背負ったまま事務所のドアを開けた。

最初に目に飛び込んできたのは何時になく真剣な顔をした小五郎だった。

「昨日までの3日間、ずっと家を見張られていた気がするんです。家の周りで見かけない人をずいぶん見るようになって。それで盗聴の恐れもありそうだったから、電話もできなくて・・・」
依頼主は女性のようだ。

コナンは彼女の語る言葉に目を見張った。

「やはり、ご主人は何者かに連れ去られたんでしょうな。しかし、こうも手掛かりがないとなると、捜索は困難です」

「解っています。犯人の居場所が国内外かもわからないのに、無理なお願いを立てているのも」

「そんなに、手掛かり無いの？」

話に夢中になっていた二人はようやくコナンの存在に気付いたようだ。

「お前、いつの間にかえっていたんだ？」

「今さつき。誘拐事件？」

言いながらコナンはテーブルの横まで来た。

「あまり、首突っ込まないでくれる」

「何言うのゆすら！謝りなさい！」

ソファの後ろからでは分からなかったが、自分と同じぐらいの背格好をした女の子がいた。

依頼主の子供のようだ。

コナンは拒絶の言葉よりも彼女のやたら鋭い眼光のほうに驚いた。あまりにも子供らしくない眼差しだ。

コナンもゆすらも黙っていると、小五郎が冷えた空気を取りなすように苦笑交じりに弁解した。

「いやあいんですよ！そいつは何かと事件とかに首突っ込みたがる性質なんで、たまにど突いてやらないと 勝手に何し出すか分かったもんじゃありません！」

アハハハと笑う小五郎に便乗して紫も困ったように笑った。

黙っているコナンを一方的に睨みつけていたゆすらは笑いあう大人たちを尻目に、視線を外した。謝罪の言葉はなかったがコナンはおとなしく引き下がることにした。

割とあっさりだな、と小五郎はその背を見て思ったのだった。

自室にて、コナンは一人考え込んでいた。

あの目、どこかで見たことがある。

どこでだ？そんなに前のことじゃない。誰の目だった？

普通の人間にはあり得ない目だった。

一体、どこで見ている？

ぐるぐるした思考は、結局蘭が帰宅するまで続くのだった。

始動：- 1 2 (後書き)

拝啓

「梅雨明けの雨」、第一話です。第一話なのに変なサブタイトルだ
と思っただ方も多いでしょう。種明かしは追々いたします。

だいたい毎週1度、月曜日か日曜日に一話分更新する予定です。

一話あたり1日分の話を盛り込むつもりなので長さによっては前後
編に別れることもあります。

ご意見、ご感想のほどお待ちしております。

敬具

アイラグ

追伸：アイラグはお酒の名前ですが別に黒の組織をイメージした訳
じゃないです。

翌朝、陽が昇る少し前。

次元は高いびきを掻いているルパンを起こすこともなく、かと言って起こさない為の気遣いもなくNYのアジトを後にした。

同じ日、6月15日日本東京都。19時ごろ、米花市・毛利探偵事務所のあるテナントビル。の、3階。

「あ、お帰りなさい」

「お帰りおじちゃん」

墨縄紫と名乗る女性が依頼と共に転がり込んでから、2日目の夜だった。

あれから小五郎は一人で調査を行う羽目になったのだ。もちろんそんな手ではかどる筈もなく調査1日目にしてすでにくたくたである。

「あ、・・・」

小五郎はそう言うなり玄関に座り込んだ。

「ちよつと大丈夫？今日どこまで行ってきたの」

蘭が駆け寄るが小五郎はそのまま腑抜けた様子でビールくれ、と言っただけだった。

もー、しっかりしてよねー。と、言いながらも蘭はビールを手渡し小五郎の分の食事を用意しに台所へ行った。

「ねー、おじちゃん」

「・・・つは！！生き返るー！」

「おじちゃんつてば」

「あ？なんだ？」

「あの依頼主さんのことなんだけど」

昨日、小五郎と紫は捜査や資金、料金のことで結構遅くまで話していたらしく、小五郎が帰宅したのは結局9時を回ってからだった。

深夜、というにはあまりにも早すぎる時間帯だったが、疲労も加担

してか蘭とコナンには明日から外での仕事だ、としか今度の仕事の事は教えてくれなかった。

「ルパン三世の関係者？」

「ぶっ!？」

小五郎はその一言にビールを噴き出した。

「蘭!蘭!布巾くれ布巾!」

「ええ!?!何やってんのよ、もったいないなあ」

カマかけたコナンは、オイオイ凶星かよと、わかりやすい反応に呆れていた。

シャツをぬぐって、布巾を蘭に返すと小五郎は靴を脱いで小声でコナンに話しかけた。

「ちげーに決まってんだろ!何言うんだ!」

「じゃあなんでビール噴き出すようなわかりやすい反応してんの?小声になる必要もないでしょ?」

「そ、そりやおめーあいつにやヴェスパニアで風邪引かされた恨みがあっからに決まってんだろ!」

今度は俄然大声になった小五郎はさらに墓穴を掘っている様子だ。

「じゃあ聞ぐが、どうしてそう思った」

「あの女の子、ゆすらつていったよね。あの子の眼どっかで見たことあるなーって思ったんだ。そしたらヴ

エスパニアで会ったルパン三世の仲間・・・名前は知らないけどね、あの人の眼とおなじだつて気づいたんだ」

大人でも常人ではありえない眼光。確かに見覚えがあった。

「・・・それだけか?」

「十分じゃない?当たり前でしょ」

「・・・ああ」

諦めたように小五郎は天を仰いでつぶやいた。

極秘で引き受けた仕事の割にあつさりと答えるもんだ、とも思ったが、もはや完全にお手上げ状態なのだろう。小五郎の姿は半ば投げやりのようにも見えた。

「教えてよ」

「・・・」

「仕事内容が極秘なことぐらいわかってるよ」

「余計な詮索すんじゃねえ」

「そんなこと言ってどん詰ってるみたいじゃん」

「おまたせー」

蘭が食事を持って居間に入ってきた。

「な、何？この空気」

嫌に冷えた居間の雰囲気気付いたのだろう、蘭の顔が引きつった。

小五郎とコナンは同時にため息をつき、同時に

「何でもない！」

と叫んだのだった。

小一時間前。米花市内の某ホテル。

毛利さんからの連絡はない。

捜査が難航していることぐらいわかる。手掛かりなんか無いから。

お手上げ状態になっていたとしても、責められない。だからといって、私に出来ることは、もう無い。もう何も出来ない。

「お母さん、せっかく東京まで出て来たんだから、少しぐらい外に行こう？」

「あまり部屋の中にいるのも、体に悪いから」

「元気、出して・・・？」

「ねえ、お母さん」

このホテルに来てからというもの黙って携帯電話の着信を待ち続けている紫に、ゆすらは何度も何度も話しかけた。

帰ってくる言葉の調子はいつもと変わらないけれど、どうも気のな

いものばかり。

食事はルームサービスだから、部屋から出ることはまずない。

18時にはその日の捜査をやめるよう、互いに了承しているので紫は18時を過ぎるとため息とともに待つのをやめる。

ゆすらもそんな母親の一本調子に早くも音を上げそうだった。

「まだ、1日目だったのに・・・」

ベッドに突っ伏して愚痴った。

「何か言った？ゆすら」

「・・・お母さん、こんな調子じゃ体壊すよ？」

顔だけ起き上がらせて、ゆすらは紫に言った。

「うん・・・わかってるわ。わかってるんだけど・・・お父さんのことが心配だから」

困ったように笑う母親に、軽くイラつきを覚えた。

「心配なのは解るけど、お父さん、心配しすぎてお母さんが体壊したりなんかしたら絶対自分責めるよ。お父さんのこと想ってあげるならもう少し元気にしてない」と

「そうね」

「だからさ、明日は外に行こうよ」

「そうね」

「おかあさん」

言ってもらちが明かない。どうしたらいい？

「ねえ、極秘にする必要、もう無いんじゃない？元人斬りの大泥棒で国際手配犯だからってお父さんはもうCIAとペンタゴンの計らいで一般人になれたんでしょ？墨縄アオイって名前で今はそれなりに有名な彫刻家。この間次元さんに引っ張り込まれちゃったけど、もう犯罪と何の関係もないでしょう？」

「五右エ門さんはもう一般人よ。私は五右エ門さんが犯罪者として世間の明るみに出るのが怖いんじゃない？どこにいるのかも何が目的なのかも分からない犯人が、公になった暁に何をすることが分からないから怖い」

はじめて紫がゆすらに向き直って話した。

「お父さん、刀持って行ったじゃない」

ゆすらはベッドに座りなおした。

「誘拐された先でも持つている可能性なんてほとんどないわ」

「素手でもそれなりに突破できるんじゃない？」

「ペンタゴン騙ってくるような人が半端なセキュリティで五右エ門さん誘拐すると思えない」

「何言ってもダメ？」

紫は、やっぱり困ったように笑った。

「私は待つていきたいの。毛利さんに頼んで、それ以上私に出来る事は無いから。ゆすらは、どうしたいの？」

なんか、キレそう。

「私、家に帰りたいの」

「お父さんのこと心配じゃない？」

「・・・ごめん、ホントのこと言ったらね、あたし心配なんかしてないの。心配なのはお母さんの事だけ。正直に言つとお父さんの事、家族だとは思っているけど嫌いだから。それからね、飛騨は電波が届かないようなド田舎じゃないの。学校休んでまでついて来たのはお母さんの行動に歯止めをかけるためであって、お父さん探す為じゃない。でもあたしが帰ったら毛利さんと一緒に捜索出来るから、お父さんの為に来ること増えるね」

「・・・」

「失望してる？するよね。ごめんなさい。お母さんの好きな人の事、心配も出来ないで。でも、あたし いじめられた原因 に心配できるほど優しくくないの！」

叫んだゆすらを、紫は抱きしめた。

抱きしめたまま、母は何も言えなかった。

ただ、その時娘のために出来たのはその小さな肩口を涙で濡らすことだけだった。

9時ごろ。

蘭は勉強のために自室へ、コナンと小五郎は例の話をいまだ断ち切

れずに居間に居座っていた。根強く話を聞きたがるコナンに小五郎は折れて、口外不可を条件に依頼主の名前と行方不明者の名前と写真、それから例のペンタゴンからの手紙を見せることにした。要するに、全部話すことにしたのである。

「ふーん・・・あの石川五右エ門て言うんだ・・・」

どこかの海に行った時の写真だろう、水着姿の五右エ門が、どういふわけか丸々太ったカツオを二匹も抱えた、振り向きざまをまさしく不意打ちと言わんばかりの一枚だった。何でも、写真は撮るけど写りたがらないらしく、ゆすらが撮ったこの一枚しかまともな写真がないらしい。

だが、コナンの思った通りあの刃物のような眼光は彼のもので、それはフィルムを通してでもわかった。

そういえば、ヴェスパニアの金庫がえらいことになっていたけど犯人この人かな。と、コナンは思った。

「あー。エサはこの手紙だったそうだ」

テーブルに片肘をつき、ハイライト片手に小五郎が言った。

「これ？・・・なんていうか、もー文章でもないね」

「その単語の羅列は暗号の様でもないし、消印はバージニア州のもの。昔ペンタゴンに所属していたちゅー人間だったら、まず疑いようがないな」

それにペンタゴンが嘘ついているのもあり得るし。と、小五郎は付け加えた。

封筒の裏にはペンタゴンの正式名称。

「おじさん、石川さんは

「墨縄」

「っへ？」

「婿養子だそうだ。本来なら、正当な妻を娶り石川家の後継者となる立場だったが、20年以上前に石川家は滅ぼされたので、そうなのっいたらしい」

滅ぼされたって、20年前は戦国時代だったか？

「誰に滅ぼされたの？」

「ああ、そりゃ聞いてないな。・・・そっか、その時の連中が最後の一人である墨縄さんを攫っちまったってのもあり得るんだな」

「0っていうわけじゃないけど、相当低いだろうけどね」

ガクツと、小五郎の顎が肘をついていた手から落ちた。

「それよりさ、この手紙サインも何もないんだね」

「あ？そりゃ宅急便じゃねえんだ、サインなんか

「そうじゃないよ。いし、じゃない墨縄さんは特別措置でペンタゴンに所属していたんでしょ？だったら今は何の関わりも無い筈じゃない。それなのに、今更目的も書かれていない手紙が送られてきて、きつと面識がある筈の国防長官、またはそれに次ぐ地位の重役のサインがないって・・・おかしいと思わない？」

ましてや、国際指名手配犯だったような用心深い人間が、それに気づかないとも考えにくい」

小五郎の顔色が変わった。

「墨縄さんがペンタゴンに連絡を取ったかどうかは知らないけど、墨縄さん、もしかしたら自分の身に何が起こるか全部承知の上で成田に行ったのかもしれないね」

もつとも、何が起こるかどうかなんて、今の俺たちには何にもわからないけどね。

コナンも感づいていた。これが、単なる誘拐事件ではないことぐらい。

漠然としすぎているが、近いうちに必ず、一つの家族が背負うには重すぎる何かが起こる。身代金目的の恐喝でもない、私怨による復讐でもない、あらゆるものを巻き込むような何かが。

蘭の朝は忙しい。

主婦と学生を掛け合わせたような生活だから、当然と言えば当然だ。起きて着替えて朝飯食べたら行つてきます、とはいかないのである。朝食を作り、洗濯をして、それに加えて父親と居候人を叩き起こす仕事もある。

「ほら！お父さんもコナン君も起きて！朝だよー！ね、起きてつてば！私今日朝練があるから急いでるの！」

「あー、わかつたわかつた、朝からそうがなりなさんな・・・」

「うああ・・・、オハヨ蘭姉ちゃん」

「おはよう、コナン君。お父さんも今日忙しいんでしょ？」

小五郎は返事ともあくびともつかないような声しか出さなかった。なにしろ、昨日一昨日の肉体的疲労に加え、昨夜には追い打ちをかけるような精神的疲労に襲われたのだから。

昨夜、コナンと顔を突き合わせて話した後、唐突に思い出したのだ。別に特別捜査本部を組んだって記者会見でもやらねえ限りマスコミ絶対勘づかねえよ。

「あの奥さん、神経質すぎるっての・・・」

バサ、と朝刊を広げて朝食もそこそこ、小五郎は社会面を読み始めた。

「私もう行くから、お皿洗いよろしくねー！いつてきまーす！」

「うあ、・・・」

「いつてらっしやーい」

蘭が先に行ってしまった事で毛利家の中は一気に静かになった。

「おじちゃん」

「んあ？」

そろそろスイッチ入れろよ。

「これがさ、ものすごい大きな事件につながっている可能性が高い

つて早く伝えといた方が良いんじゃない？」

「たかだか小1のガキンチョの考えなんざ真に受けてねえよ。根拠ねえし裏とれてねえし、ンなこと言ったところで奥さん倒れるつちゅーの」

「んじゃどうすんの？また昨日みたいにへ口へ口になる訳？」

「あー、うつせえ！もう首突っ込むんじゃないやねえっ、クソガキツ！」
骨と骨がぶつかるような音と同時に、短い悲鳴が毛利家に響いた。

平和な朝だった。

もし、この様な朝でなくとも世界面の凶悪事件のベタ記事に目を通す日本人は少ないだろう。

日本人に限らずとも、嫌な事件の記事など自国の分で十分だと思うだろう。

東南アジアの臓器売買問題や、オーストラリアの山火事の記事。

同じ海外のニュースでもメキシコ湾の原油流出事故の記事はそれらよりずっと大きくて、ましてや日本国金融の危機を匂わす記事は一面トップを飾る。

不安をあおるような嫌なことは自分の身の回りの事だけで十分だ。

身近にあるものこそが、我々の日常を作るもので、地球の裏側の出来事は我々の日常を作らないのだ。

<南米某国、14日未明、山間の人口30人程の村が死滅しているのが発見された。家屋に破壊された形跡は無く、死亡した住民は全員こめかみを一発の銃弾で打ち抜かれて即死していたため、地元警察は集団自殺とみて捜査を進めている>

「いつてきまーす」

「おー」

食事を終え、食器洗いは小五郎に任せ、コナンは階段を転がるように降りて行った。

いつものように元太達が、一緒に登校できるよう待っていてくれる場所まで走っていく。……つもりだった。ある人物の発見の為に足が止まったのだ。

「……ゆすらちゃん？……」

生まれた時から何度髪の毛を切ったのだろっと思っような、背中の半ばまで長く伸ばされた真っ黒な髪。母親とお揃いに高い位置でくっっており、彼女が歩くりズムに合わせて左右に揺れていた。心なしか、歩き方が乱暴に見えた。

車道を挟んで向こうの歩道を一人で歩いていた。先日、顔を合わせるとき体格差がほとんどなかったから、A P T X 4 8 6 9 を服用していないなら大方、小学一年生程度の年齢だろう。

そんな幼い子供が、朝から一人で出歩くだろうか？

行き交うサラリーマンに紛れてよく見えなかったが、ゆすらの右手には赤い、小さなめのトランクが握られていた。

そっいえばその格好も、朝の散歩と言わんばかりのラフな服装ではなくきちんとした外出着だ。そして、歩いている方向は周りのサラリーマンに違わず米花駅。

まさか。

コナンは横断歩道を渡り、走ってゆすらを追った。

「ゆすらちゃん！」

「!？」

まさか見知らぬ土地で我が名を知る人間がいるとも思っていなかったのだろっ。あからさまに肩をびくつかせてゆすらは振り返った。

「あ、貴方……名前教えた覚えはないけど。」

この子、本当にA P T X 4 8 6 9 飲んでないよな。灰原みたいなんだけだ。

一瞬だけ安堵したような表情を見せたが、本当に一瞬だけですぐに例の刃物のような眼になった。

「ああ、ごめん。俺は江戸川コナンっていうんだ。君の名前は？」

「・・・墨縄ゆすら」

「ゆすらちゃん、単刀直入に言うけど、なんで帰ろうとしてんの？」

「なんで学校に行くのかって聞いているようなものだよ？それ」

「は？」

「学齢児童にあたる人間が、学校に行くのに理由なんかいらないでしょ？家に帰るのに理由がいると思う？」

「ひとりで帰ろうとするのは誰でも不審に思うけど？」

「こんな性格だから大して疑われないの。余計なお世話」

「コイツ灰原とソリが合うかも。っーか、扱いづれえ・・・」

「じゃあ理由教えてくれない？」

そう下手に出たら、ゆすらは少し笑ったように見えた。コナンも笑い返したら、すごい笑顔で、

「嫌」

と返された。顔が引きつりそうになった。

「さすが石川五右エ門の娘・・・」

思わずそう呟いたら、急にものすごい剣幕で怒鳴られた。

「私の前でその名前出さないでくれる!？」

「っ、こんな往来ででかい声出すなよ!」

「ねえ、さっきから思ってたんだけど、貴方学校行かなくていいの?」

「・・・はぐらかすなよ・・・。気が変わった。ゆすらちゃんから、事件のこと聞きたいし一人で家に帰して事件こじらせたくない。来て欲しいところがある。」

「は?」

「ちょっと待ってて」

そう言ったところで本当に待っているとも思えないので、右手でゆすらの左手首をつかんだ。振り払われるかと思っただが、以外にも大人しかった。

ポケットから阿笠博士が作った携帯電話を取り出し、阿笠邸に連絡

を入れた。

「・・・もしもし」

「あ、灰原か？」

「何？お見舞いの電話ならいらないわよ」

灰原は一昨日から夏風邪を引いたとかで学校に来なくなっていた。今も声の本調子ではないことを物語っている。

「今からそっちに行く。博士叩き起して、学校に俺も夏風邪引いたって伝えるよう言ってくれ」

「なんかあつたの？言っとくけど、歓迎はしないわよ？」

「お前が歓迎してくれた例なんかねえだろ。第一、平日の朝っぱらから博士のところに行くとか、何もなければありえねえから」

「・・・それもそーね、何もないのにこんなところ来る物好き、あなた一人で十分だわ」

「・・・ほつとけ・・・」

頼んだぞ、と言って通話を切った。

「なんで、振りほどかなかったの？」

ゆすらは今、コナンを睨むでもなく只、見ている。

「振りほどいて欲しかった？」

「いや。ただ、君ならきつと逃げ出すだろうと思ったんだ。本気になれば絶対に逃げ出せれるのに、大人しかったから不思議に思った。」

「ヴェスパニアの事件」

先ほどとは打って変わって、随分しおらしい印象になった。

「事件の顛末の大方は父から聞いているの。探偵と少年のお陰で事件が解決したって言うていたけど、実際に解決したのは、貴方だけでじゃないかって思ったの」

だから、信用してみようと思った。

少し間をおいて、コナンは用心深く言った。この子供は一筋縄では通じない。

「何故、そう思った？」

帰ってきたのは意外な答えだった。

「頼れる対象があるから」

毛利さんは、口を堅い人を集めれば良い事なのに、・・・そこまで頭が回らなかったのかもしれないけど、自分だけで動くって言ったから。

コナンは、その答えに少し困った様に笑った。

「悲観しなくても、おっちゃんにも頼れる対象はあるよ？おっちゃんも今日、特別捜査本部組む話をゆすらちゃんのお母さんに持ちかける筈だよ。・・・お母さん、今頃心配しているんじゃない？」
そういえば。

「母は今ホテルで寝ている。昨日の夜、ちょっと強力な睡眠薬飲んでもらったから早くても今日の夜までは起きないはずだよ」
だって、なんだかんだ言ってお母さん最近眠れてないみたいだったから。

困ったように笑うゆすらに、コナンは本気で思った。

こいつ、ホントに灰原みてえ。

「博士！」

万が一の為に「友達が出来たからから遊びに行く」というメッセージと、阿笠邸の住所を書いたメモをホテルの部屋に置いてきた。ゆすらの性格をよく知る者なら彼女がそんな軽率な行動に出たことを不審に思うだろうが、これ以上の手立てがない。
それに、嘘はついていない。遊びではないけど。

「新一、じゃないコナン君。一体どうしたんじゃね？その子は？」

「こんにちは」

「いいから、早くこっちに」

「来たわね、江戸川君」

地下室から哀が出てきた。案外大丈夫そう、というかすごい平気そ

うだ。なにしろ白衣を着た、いつもと違わぬ恰好だったからだ。首をかしげた。その子は一体どこの子だ、と聞いている。

「灰原。お前夏風邪じゃなかったのか？」

「そんなへましないわよ。・・・私の名前は灰原 哀。貴女の名前は？」

ゆすらに興味を持ったらしい哀は、ゆすらに近づいて名を尋ねた。

「墨縄ゆすら」

今度は、ゆすらは素直に且つ聞かれたことだけを答えた。棘は落ちたものの警戒してはいるらしい。

哀の表情が、ほんの僅かな反応を見せた。

「じゃあ墨縄さんでいいわね？私の事も苗字で呼んで」

「わかった」

「おいおいおいおい、俺を差し置いて話進めるなよ。灰原、その子が誰だかわかっているのか？」

「当然でしょ？あたしが夏風邪引いたって時点で気づくべきだったわね」

「哀君はこの2日間、この前起きた世界的規模の事件について調べていたんじゃないよ。」

博士の一言に、哀は一瞥するとコナンに向き直った。

「被害者の中に Suminawa って日本人がいたの」

「ちよつと待って」

ゆすらの顔色が変わった。

「お父さんが関わって事件、そんな大規模の話だったの？それに、灰原さん、そんな情報どこから・・・？」

「お父さんだったのね」

「灰原」

「貴女のお父さんの事、もう少し詳しく教えてもらいたいの」

「おい灰ば」

「じゃあ交換条件。私は父の過去と今を教える。灰原さんは情報源と事件の真相を知る限り教えて」

静止の為に哀の名を呼んでいたコナンだったが、ゆすらのセリフにギョツとした。

博士も同様だ。

哀に至っては、満足気に笑みを浮かべていた。

「貴女、結構頭いいわね。いいわよ、その条件呑むわ」

「有難う」

「お、おい哀君・・・」

「これから起きることの手掛かりになるかも知れないの。みすみす逃すわけにはいかないわ。墨縄さん、この拉致事件はただのプロログよ。覚悟しておいてね」

小1の子供に対して、残酷すぎるのではと博士は思ったが、コナンは黙ってゆすらの応えを待った。

この子は、普通の子供と違う。

「いつ死んだとて、父は後悔しないから。私も、父の命は惜しまない」

ゆすらの応えの方が、よっぽど残酷だと思った。

始動：-10a（後書き）

拝啓

大変遅くなって申し訳ありませんでした。なんせ話が長かったもんだから…！

長いけれど、大して進展していません。哀ちゃん出したかっただけです。

あと、それから前作をupした後、「Yルって結局どんな絵柄でどんな話があったんだっけ？」と思って読み返しました。で、思ったこと。

女装がマスク無しで出来る父親なんて嫌だ。

前言撤回します。

やっぱり五右エ門は風魔の絵柄のイメージで書きます。

話変えますけど、3日ぐらい前に「ふしぎの海のナディア」観ていて、ノーチラス号クルーが大好きになりました。特に水準操作員。長髪で顔の右半分が髪の毛で隠れちゃってる人。名前も無いような脇役ですけど、存在感ありまくりです。で、グランディスさんに2回も突っかかるバカ。

かわいいです。でも好きな人は少ないと（知っている人も少ないだろうと）思っていたのですけどね・・・

では、ご意見ご感想のほどお待ちしております。

敬具

アイラゲ

こっち、と言われてゆすらは哀に連れられて地下室に入ってしまった。コナンをお呼びでない様子だったが、一緒に入ってしまった。

「まずあたしの方から言うわね」

薄暗い室内の、パソコンのモニタの前に座り、コナンとゆすらにも見るように促した。

英文のページで、極々シンプルなウィンドウだった。

「これは、CIAの局員だけに公開されたページをハッキングしたもの。墨縄さん、英語読める？」

コナンは慣れているから、ハッキングなどに驚きもしないがゆすらはそうでも・・・

いや、大した覚悟をしていたようだ。むしろ、この落ち着いた様子に驚かされる。

「日常会話程度ならともかく・・・ごめん。これは難しい」

いや、その齡で日常会話がいけるなら大したもんだと思うぜ？

「じゃあ訳すわね。“標準時間2010年6月11日を前後し、世界各国で殺しを主とする犯罪者が姿を消した。国籍不明のチャーター機が同じ頃に確認されているので、関連性は大きいとされる。但し目的、首謀者は不明。暗黒街の情報流通ネットワークが大きくなっているため、世界各国のマフィアも情報はすでに把握している。」

中でも不可解なのは元・特A級国際指名手配犯の墨縄五右エ門も含まれているということ。拉致された犯罪者の数は10人、それぞれの略歴・情報は別窓にて”

・・・この墨縄五右エ門が貴女のお父さんのね？」

「うん。でも、そしたら灰原さん、もう父の事知っているんじゃないの？」

「略歴だけね。現在日本に定住、使用する武器は日本刀、元殺し屋でルパン三世の仲間、今は彫刻家。私としてはもっと詳しいことが

知りたいの」

ゆすらは少し黙った。少し考えているようだ。

「ねえ、拉致された人にどんな繋がりがあるの？略歴のページ、開けるんでしょ？見せて」

口調が焦っている。

「ゆすらちゃん、大丈夫か？」

「大丈夫。ありがと」

哀は、無言で一人目からウィンドウを開いていった。

わかったことは、年齢は23歳から35歳までの開きがあり、使用している武器も一般的な拳銃や、小型のナイフ、特殊なものでいえば猛毒を塗った針、火炎放射器、大型バズーカまであり、統一性を求めているとも思えない。

人種は大まかに白人4名、黄色人種3名、黒人1名、残る2名が複雑な混血人種だった。やはり、これにも関連性を見出せない。

男女比も6対4とほぼ同率。

拉致される前までしていた仕事に至っても、マフィアの用心棒、暗殺組織の要人、傭兵部隊のエキスパート、金を積めば動く殺し屋・
・様々だ。

共通点を見いだせない限り、目的も読めない。

「腕が立つ殺しの専門家。共通点はそれだけみたいだな」

「あたしもそう思うわ。何度も見返したけど、この情報だけではそれしかわからない」

「殺しの専門家だったら、次元さんが入っていてもおかしくない筈だよ。ううん、入っていないとおかしい」

モニタを凝視していたゆすらがそう言った。

「次元さんて、あの黒いスーツを着た、髭面の？」

コナンの問いに振り向き、頷いた。

「お父さんから聞いたことがあるの。次元さんは銃火器の最高エキスパート。早撃ち、狙撃手の腕をもってして世界1、2の座を争う存在だって」

そうだったのか・・・と、コナンは思った。以前パパと言ってふざけていた相手が、そんな存在だったとは。

「元、傭兵部隊所属。あだ名が、“死神”」

「なんだって？」

思わず、聞き返した。

「“死神”。ずっと前についた名前で、今は次元さん本人も嫌いらしいし、もう、伝説みたいになってるって聞いたけど・・・。けど、お父さんが言うには、死神の名前は表面的な存在に与えられた名前じゃないんだって」

「なるほどね。殺しの最高峰、ともいうべき存在か・・・。確かに殺しのエキスパートを集めているというのならいいとおかしいわ」

「灰原さんは、どう思う？殺しばかりをしてきた人間を集めて、首謀者は何をするんだとおもう？」

「さあ。あんまり分かりたくないわね。だけど、もし私が首謀者だったらやることは世界征服ね。殺しのエキスパートが10人いればどんな軍もかなわないわ」

ああ、核ミサイル撃ち込まれたらさすがに死んじゃうけど。と、哀は一人で笑った。

「核ミサイル？」

「そうよ、アメリカは何千個ため込んでいたかしらね」

「核弾頭ミサイル、わかるよね？」

当然でしょ、とステレオで返された。ホント、扱いづれえよこいつら。

「そうじゃないの。今思い出した。核ミサイル効かないかもしれないっていい」

たつぷり5秒の間があいたと思う。核ミサイルが効かないって、誰か核シエルターでも背負っているのだろうか？亀じゃあるまいし。

「・・・なんで？」

「実際に見た事はないんだけど、お父さん、迎撃ミサイルを切り落としたことがあるらしいから。あと、大きいものでいえば超合金ス

テルス戦闘機とか。でも、ぶつちやけ嘘か本当かもわからない」

「いや嘘だろ。どう考えても嘘だろう？だって、ゆすらちゃんのお父さん、使っているものがウォーターカッターならまだ解るけど、日本刀だろう？切れる筈がない」

コナンの言葉に、ゆすらは神妙にうなづいた。

「江戸川君の言うことはもつとも。それが普通の反応だもん」

「あら、じゃあ大して驚かない私は普通じゃないってことね？」

「えらく肝の座っている人ってことなんですよ。それとも、知ってた？」

「いいえ」

「・・・父が持っている刀の名は斬鉄剣。森羅万象、斬れぬものは無い。何百年もの昔から様々な伝説を抱えて世界を渡り歩いた刀らしい。一般的に妖刀とか言われる類のもので、父は気付いたらその刀を持っていたと言っていた。妖刀は持ち主にそれ相応の力がないと扱えない。刀に見合った力量の人間の手にあつてこそ、名刀となる刀」

斬鉄剣にまつわる話だよ、と、ゆすらは閉めた。

「斬れないものがない刀なんて、あるとしたら刀の頂点。それを扱う貴女のお父さんもまた、剣豪の頂点っていうわけね」

そうだ、とゆすらが返答する前にコナンが口を開いた。

「人間なのか？そんな事ができるなんて」

現実がかげ離れていく。

「妖刀とかいう以前に、物理法則はどこに行つた？俺には到底、人間業に思えねえ」

「人間じゃない、って言ったら分かってもらえる？」

コナンと哀はゆすらを振り返った。

「裏の世界で、ルパンさんは不死身の男と呼ばれ、次元さんは死神と呼ばれた。残る石川五右エ門は、闘神と呼ばれた。これだけは確か」

絶句した。どれも、人間が背負う呼び名ではない。それとも、これ

が、彼らが背負った業か。

「人じゃない。この話を聞いた時、私はそう思った」

「で、貴女の話をもとめると十三代目石川五右エ門はかつて闘神と呼ばれ、戦車・ミサイル・至近距離で撃たれた銃弾さえ切り落とす、剣豪の極致。ということね？」

「うん・・・あんまり詳しいこと言えなくて、ごめん」

「いいえ、十分よ。ありがとう」

地下室に入って2時間。交換できた情報は、哀にとって大したものでは無かったが、ゆすらにとっては相当大きかった。

そして、コナンにとっても大変な情報が増えた。

彼は知る由もないが、今、彼が思い至っている考えは、ドバイに行つたルパンとほぼ一致している。

「灰原さん」

「何？」

コナンは、馬が合ったせいで危険分子となりつつある2名を、少し離れたところから見ていた。

「個人的な話、してもいい？」

「ええ」

「墨縄の家ではね、父の素性を隠していたの。元人斬りの泥棒だつて事は、本家の私達3人と、ひいおじいちゃんしか知らないことで、村の人にも隠していた。だけど、2カ月前、それが村にばれたの」

「それで？」

「もともと過疎化しかけている小さな村だったから、ある程度の理解は得られた。だけど、それ以後村の人の対応は、父にはもちろんよく知っている筈の母に対しても、よそよそしくなった。私は学校でいじめられた」

人殺しの子供、犯罪者の子供

「死んでしまえと言ってきた友達だった子より、父を恨んだ。生まれた時から犯罪者になることが決まっていたと聞いたけど、それで

も恨んだ。父は私に頭を下げて謝ったけど、今でも刀を手放さない父が憎い」

「手放してほしいの？」

「父がなぜ彫刻の仕事を選んだか分かる？刀を使う仕事を探したあのひと、あの刀に取りつかれている。ペンタゴンで何をしていたか教えてもらえなかったけど、もう一般人て言うなら、刀なんて関係ないじゃない。あんな血生臭いもの持っていてほしくない」

「服部君ならなんていうのかしらね、ねえ江戸川君？」

「知るかよ。だいたい、服部が持っているのは人殺しの剣じゃない。剣豪の格が違う」

「・・・それは、服部君の方が上ってことね？」

「当然だろ。あいつの剣には、血塗れの剣は勝てねえさ」

「血塗れの剣・・・か。言いて妙だね、正にあの人そのものだ」

「君に言うのは少し酷だけど、法律上の罪は消えても事実は消えない。君のお父さんは、死ぬまで犯罪者だ。もつとも、それは君の責任でもないし、君がいじめられた理由はどこにもないけどね。」

「ゆすらちゃんは、最初俺に首を突っ込むなって言っただけど、同じ理由でいじめられるかも知れないって思ったからなんだろう？」

「・・・うん。変に疑ってゴメン」

「謝ることじゃない。警戒心があって当然だよ」

「あのね、突発的なんだけど、江戸川君に聞きたい。なんでここまですべて事件に関わろうとしているの？毛利さんの仕事を探偵だからって、江戸川君本人には関係無い筈だよ？別に関わるなって意味じゃないけど、ただの好奇心だけじゃ無いでしょ？」

「ああ・・・それは・・・俺も、探偵だからさ・・・」

どこか、明後日の方を向いているコナンの答えに信憑性は無かったが、ゆすらはそれで納得しておく事にした。

話し疲れた。

眠たくなった。

きつと今頃、変に動かれちゃ適わないと麻酔針と睡眠薬で眠らせた小五郎もぐっすり寝ているだろう。

「寝ちゃったわね」

「ああ」

「強がっていたけど、やっぱり子供は子供ね。でも、親のせいで子供がづらい思いするなんて、可哀そうすぎるわ。なんで石川五右衛門は暗黒街に留まっていようとしなかったのかしら」

「さあなあ・・・」

「だいたい、どうやってこんな扱いづらい子供になるのかしら。あたしだって、6歳の頃はもっと子供らしかったわよ？」

「・・・どうだかな・・・。とりあえず、今のお前と、よく似ていると思ったけどな」

始動：- 10 b (後書き)

拝啓

2話連続投稿です。と言つても、単なる前後編ですけどね。
次はもう少し進展します。

前話のあとがきの続き。

水準操作員が好きすぎて大変なことになりました。だって、なんだアイツ。すつごくかわいい。旧ノーチラスの制服の、あの帽子とか似合いすぎているし、ただでさえかわいいのに・・・!!!!!!

だけどころなマイナーキャラ好きな人は少ないだろうと思っていた。
(過去形)

セリフ少ない、(設定が無口だから)ちゃんとキャストイングされていない、おまけに名前がないっていうようなものすごい脇役だからしょうがないだろうと、思いました。(過去形)

が。

某アンオフィシャルコミュニティサイトでの「ナディア」全キャラ
人気投票結果、

1位 水準操作員

・・・え？

名無しのくせに！？主人公2位と4位なのに！？半端ねえなこいつの
人気！！信じらんねえ！（3位は測的長のエーコーさんでした）
誰か水準操作員メインの小説書いてください。

ご意見ご感想のほどお待ちしております・・・水準かわいいよー。

アイラゲ
敬具
・
・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5311m/>

梅雨明けの雨

2010年10月9日06時39分発行